

明治期における英国のレトリックの受容 (VII)

——今村長善『文章哲学』における詞姿論の性格——

有 沢 俊 太 郎*

(昭和63年10月26日受理)

要 旨

『文章哲学』(Philosophy of Composition, 1889, 東京)は、今村長善の書き下ろしの書ではない。その多くの部分は、西尾光雄氏の指摘されるように、A.ペインの“English Composition and Rhetoric”が抄訳されたのである。この書物には多くの版があるが、調査の結果、今村はそのアメリカ版(1871)を翻訳の原本としていた。もちろん、『文章哲学』には、今村が自分自身で書き加えた部分もある。しかし、この場合も、特に詞姿論の記述の場合、彼はしばしばH.スペンサーの“The Philosophy of Style”(1858)に言及している。

訳本と原本とを比較すると、まず、PART I STYLE IN GENERALにおける構成の違いが注目される。この違いの持つ意味は、スペンサーとの関係もあり、見かけほど単純なものではない。

次に、原本その他の資料の表現と訳本のそれとを比較すると、訳本の詞姿論においては、次の三つの問題があった。

- (1) 隠喩論(論言論)における創構論の欠落の問題
- (2) 詞姿中、提喩(挈領法)の取り扱いの問題
- (3) 対照格における、説明の細部が省略されたことによる問題

今村による style の把握の仕方を考えれば、これらの問題の発生は驚くに当たらない。彼はペインの詞姿論の根本部について、彼が思っているほど確かに把握してはいなかった。その上、彼は、ペインの中で育っている現代的詞姿論については、ほとんど知識を持たなかった。

しかし、彼が訳述に失敗した部分こそ、実は、彼の言いたいことだったのかもしれない。その部分には、日本的な表現様式の特徴がはっきりと現れている。

KEY WORDS

style	文体(文ノ体格)	metaphor	隠喩(論言)
synecdoche	提喩(挈領法)	contrast	対照法(反対格)

1. はじめに

本稿の目的は、明治22年9月に刊行された『文章哲学』(東京・稲田佐兵衛、同・大倉孫兵衛、同・中西屋邦太、同・巖々堂支店)の構成のあり方、あるいは抄訳文や訳述文を、原本その他の資料のそれに引き戻して比較吟味することによって、この抄訳・訳述書(以下訳本という)

* 言語系教育講座

の冒頭に位置づく「文趣論」（以下詞姿論という）の性格を明らかにすることである。

この訳本は扉に、

今村長善著『文音哲学』全 (Philosophy of Composition)

と記され、あたかも今村個人の著書のような体裁であるが、その実質は、英国のペイン (Alexander Bain) の修辞学書の一部を抄訳したり、あるいは自由に訳述したりしたものである。このことは、既に西尾光雄氏によって指摘され、この訳本に関する唯一のまとまった記述となっている³⁾。そこで、これを以下に引用して、訳本の内容と本稿で行う作業の概要を述べてみたい。

……二十二年十月(九月)には、今村長善「文章哲学」が版にされている。題名には Philosophy of Composition とも記されているが、凡例に「此書第一、二巻ハ、主トシテ倍因氏修辞書ニ拠リ、旁ラカント氏、スペンサー氏、ケームス氏等ノ著ヲ参酌シ、第三巻ハ、諸大家ノ説ヲ引證シテ編次セリ、」とあって、ペインの「英作文と修辞学 (English Composition and Rhetoric)」の抄訳ともいわれる書物である。したがってその項目は原著と同一である。ただ第三巻の文話は記すように、著者の編であろう。第一巻を「文ノ体格」と名づけて修辞を説き、第二巻を「作法」と題して、文の作法を述べているのは「美辞学」の場合と同様である。

『美辞学』とは高田早苗の著書で、ペインやスペンサー (Herbert Spencer) がしばしば引用されている²⁾。その刊行は訳本刊行直前の五月であった。また、24年には、欧米修辞学を更に消化して教育的に応用しようとした『文章組立法』（中島幹事著、開新堂）のような書物も出版されている。ペインなど欧米の修辞論は今村の身近に存在し、それが彼にも訳本刊行の意志を固めさせた一因であろう。

さて、訳本の成立には、「凡例」の述べるように、ペインが最も深くかかわっているのは確かである。ただし、ペインの「英作文と修辞学」は多くの版を持っているが、とりわけ、次の二書は訳本の性格を考える時、重要である。

1. English Composition and Rhetoric (A Manual) American edition, D. Appleton & Co.; New York 1871 (1866)
2. English Composition and Rhetoric (Part 1, 2) Enlarged edition, D. Appleton & Co.; New York 1887

1は原本として訳本の形成に直接的に関与している。項目は、次章で問題として取り上げる一カ所を除いて、同一であり、訳文も対応する原文を持つ場合が多い³⁾。その点、2は、項目の配列に大幅な修正が加えられているので、訳本との距離は遠い。しかも、訳本との僅か2年間の隔りは、訳者がそれを中心的な資料として活用し得たと考えるのに不自然であろう。しかし、2は1を改訂増補したものであるため、訳者の活用の可能性、またその程度の如何にかかわらず、ペインの考えの発展を知る上で有益である。特に2で手を加えられた箇所は、ペインの修辞学の中でも重要な役割を果たしている部分なので、既に1のアメリカ版（初版）においても、ペインの考え方の原型とでも言うべきものが現れている可能性がある。そこを訳者はどのように扱っているか、問題の焦点となろう。このように考えて、1を主にしながらも、間接的資料2をも視野に入れて考察を進めることにする⁴⁾。

一方、凡例中「旁ラ……」以下に並ぶ人々の訳本とのかかわりも無視することはできない。彼らの一人一人は、副次的ながら訳本の異なった部分に何らかのかかわりを持っているであろう。本稿では三人のうちスペンサーについて具体的に考えてみたい。彼の著書“The Philosophy

of Style” (1858) の全訳は、明治 28 年に鶴田久作によって行われた。原書は明治初期から中期にかけて広く紹介され、例えば、前述の高田早苗『美辞学』は代表的な書物であった。今村もあるいは高田を介してスペンサーを知り、その説を利用するところとなったかもしれない⁵⁾。

このように、抄訳・訳述は、テキスト 1 に盛られた情報を主としつつも、様々な径路を通して伝達される様々な情報が、訳者によって適宜取捨選択されて行われているのである。それがこの訳本のような書物の特質である。そこで、研究の出発点は、まず、訳本形成の仕組みを解明することに求められる。これは、詞姿論が含まれる第一巻の原本との構成の違いを検討することによって明らかにしたい。そして、この考察の結果とも関連させながら、訳本中の詞姿論の性格を一層正確につかむために、原本その他の資料の叙述と比較吟味するという作業に進みたいと思う。

2. 構 成

原本と訳本の構成は表 1 のようになっている。

表 1 原本と訳本の構成

原 本		訳 本	
○ PREFACE (pp. 3~6) ○ COTENTS & Difinition and Divisions of Rhetoric (pp. 7~19)		○ 序 (1~4 丁) 凡例 (1~2 丁) ○ 目録 ○ 緒言 (1~2 丁)	
PART I	STYLE IN GENERAL (pp. 20~152)	第一巻	文ノ体格 (3~34 丁)
PART II	KINDS OF COMPOSITION (pp. 153~294)	第二巻	作法 (35~141 丁)
APPENDIX	EXTRACTS ANALYSED (pp. 295~343)	第三巻	文話 (142~160 丁)

この表の三(四)領域のうち、巻内の構成上最も重大な問題を提起しているのが、詞姿論が含まれる PART I STYLE IN GENERAL (第一巻 文ノ体格) の内部である。ここまで来ると、「項目は原著と同一」とはならない。

ここには、表 2 に示されるような違いがある。この違いには、両者の style (文ノ体格) に対する考え方の違いが反映しているとみられる。つまり、「スタイル」の本質をどうとらえていたか、という根本的な問いかけに対する二人の別々の回答が現れているのである。

表 2 を見ると、原本の 2 章、3 章が訳本では章とならず、款(節)となって、第一章の末尾に埋め込まれていることが分かる。これがスタイルに対する両者の把握の違いに関連する。

ペインの場合、2 章、3 章はおおよそ次のような内容である。つまり、2 章では、①語の選択 ②語の配置 ③修辭的工夫 ④表現内容の工夫 (NUMBER OF WORD) が、3 章では、①語や文の位置 ②それらの順序の工夫 (ARRANGEMENT OF WORDS) が説かれている。第 1 章で列挙した詞姿をここで使用し練習 (EXERCISE) してみる。その際に、言葉を選択したり、

表 2 PART I (第一巻) の構成

PART I STYLE IN GENERAL		第一巻 文ノ体格	
CHAPTER I FIGURES OF SPEECH	1. FIGURES FOUNDED ON SIMILARITY 2. FIGURES OF CONTIGUITY 3. FIGURES OF CONTRAST 4. EPIGRAM 5. HYPERBOLE 6. CLIMAX 7. INTERROGATION 8. EXCLAMATION 9. APOSTROPHE 10. INNUENDO, OR INSINUATION 11. IRONY	第一章 文 趣	第一款 契合格 第二款 類推格 第三款 反対格 第四款 鍊言格 第五款 做大格 第六款 掉尾格 第七款 疑問格 第八款 感歎格 第九款 假客格 第十款 隱語格 第十一款 反語格 第十二款 字 法 第十三款 句 法
CHAPTER II EXERCISE ON FIGURES	NUMBER OF WORDS		
CHAPTER III EXERCISE ON FIGURES	ARRANGEMENT OF WORDS		
CHAPTER IV THE QUALITIES OF STYLE	1. SIMPLICITY 2. CLEARNESS 3. STRENGTH 4. FEELING-PATHOS 5. THE LUDICROUS-HUMOR-WIT 6. MELODY 7. HARMONY OF SOUND AND SENSE 8. TASTE-ELEGANCE-POLISH-REFINEMENT	第二章 文 質	第一款 簡 単 第二款 明 白 第三款 強 勢 第四款 感 情 第五款 滑 稽 第六款 声 響 第七款 音 調 第八款 趣 味
CHAPTER V THE SENTENCE AND THE PARAGRAPH	1. THE SENTENCE 2. THE PARAGRAPH	第三章 章法篇法	第一款 章 法 第二款 篇 法

順序づけたり……などの工夫が求められる。そして、これらの工夫に、スタイルに対する新しい考え方の一端が認められるのである。

スタイルとは、言語主体の選択意識によって生み出された言語的その他の変種である。語や文の位置や順序について、複数の可能性から、ある一つを選択・判断するということが、スタイル発生の基本的要件である⁶⁾。語や文を越えてなされる選択・判断であっても同様である。この場合は、文章の領域（原本では、第5章のTHE SENTENCE AND PARAGRAPH）にもかかわってくるわけである。

この点に関して、ペインは次のように言う。

私は、ひとが言語技能を行使するとき、助けや指示となりそうな文章中の原理や法則を集めようと努力したのであり、実際的に用途のない専門用語は除いておいた。

これは PREFACE にある文である。彼の興味は初めから文章を成立させる一つ一つの技能や技巧にあったのではなく、それらを背後で統一している原理や法則にあった。だから彼は第1章で止めるわけにはいかず、第2章や3章、そして第5章を必要としたわけである。

ここから例えば、

言語を支配することは、実際の生活から生ずる壮大なる全体である。

というような発言も理解される。「全体の中の小さな断片」(a small fraction of that total) は、「全体」(文章, 生活)の原理の中で初めて、「生きた断片」となるわけである⁷⁾。

このような立場によれば、「小さな断片」の典型としてのそれぞれの詞姿は、その形態形式面よりも機能面が重視されることになる。全体の中で、どのような働きをしているかが問われることになろう。詞姿を様々な文脈の下で様々に動かす、その試みこそが大切なのである。スタイルはその試みの結果であり、この意味で第2, 3 (5) 章はきわめて重要な章である。

改訂増補版(テキスト2, 1887)では、このような考え方が更に深められ、構成上大幅な改変が施されている。

配列は、

ORDER OF WORDS
 NUMBER OF WORDS
 THE SENTENCE
 THE PARAGRAPH
 FIGURES OF SPEECH
 THE INTELLECTUAL QUALITIES OF STYLE

の順となり、詞姿論は、いわゆる言語(詞姿)使用論を承け、その下で見直されることになった。具体的には、「壮大ではあったが、不完全な分類であった」従来の修辞学書の詞姿目録の欠点を正し、「スタイルの主要な性格が現れているものを選び出し、詞姿の方式化」を図ることであった。それはつまりスタイルの新しい概念規定に基づいて、詞姿を再編し新しい方式(目録)を作ろうということにほかならない⁸⁾。

以上のように発展深化する原本の構成上の特質は、訳本では全くとらえられていない。原著者が重視し、やがてはそこを充実させて冒頭部に配置した言語(詞姿)使用論の部分は、逆に1章に埋め込まれて後退している。その結果、「格」と「法」という本来異なる範疇に属するものが区別されず、「法」は12, 13番目の「格」として位置づけられている。これは、従来の目録の末尾に言語(詞姿)使用論を付加した、という程度のものである。そして、これが訳本における2章分の空白の意味である。

しかし、訳本にも、言語(詞姿)使用論に相当する部分がないわけではない。それが存在しないとか、後退しているとか言うのは、ペインと今村長善の組み合わせでのみ訳本を見た時である。訳者が挙げたペイン以外の人々、例えばスペンサーとの関連で訳本を見れば、別の箇所、ある種の言語(詞姿)使用論が述べられているのである。

次にその箇所を示すが、今村はペインの文章、

There are three principal ends in speaking, to inform, to persuade, to please. They correspond to the three departments of the human mind, the Understanding, the Will and the Feelings.

:

The will can be moved only through the understanding or through the feeling.
Hence there are really but two Rhetorical ends. (p. 19)

を「緒言」において、

言語ニ主タル目的三アリ、告知シ勸説シ愉樂セシムルコト是レナリ、此三目的ハ、人心ノ
三部即チ智意情ニ対スルモノナリ……

〈中 略〉

意志ハ理会力ニ因リ又ハ感応ニ因リテ動かスヲ得ルノミ、是ヲ以テ結局修辭上唯唯二箇ノ
目的アルノミ、即チ理会力、感応是レナリ。(一丁)

と訳した直後、以下の文章を続けている。これは今村によって加えられたもので、ペインの原文にはない⁹⁾。

理会力ニ付テ主タル原理ハ、読者聴者ノ注意カヲ節約スルニ在リ。文章ハ人間ノ意想ヲ運
スル機関ナレハ、其要、人ニ解シ易キニ在リ、即チ其通知カヲ大ニシテ、其文詞ヲ簡短ニ
シ、其趣旨ヲ深奥ニシテ、其用語ヲ容易ニスルコト是レナリ。……〈中略〉……読者聴者
ノ注意カヲ節約スルノ秘訣ハ、語辭ノ選択排置宜シキヲ得、字句ノ整頓佳良ニシテ、……
感応ニ付テハ、言語ノ順序宜シキヲ得ルニ在リ、因テ以テ感受カヲ活発ナラシム、……(2
丁)

これはスペンサーの「表現の経済」の要点である。分かりやすい文、文章は効果もあるのであり、その逆も又真である。この目的を達成するために、「語辭ノ選択排置」(理会)と「言語ノ順序」という究極的には重なってくる二つの言葉が導入されている。そして、この言葉が表すものこそ、ペインとの関係では訳本が埋没させていた部分であった。それがここでスペンサーによって明瞭に浮かび上がっているのである。しかも、この文言の訳本での位置が実質的な冒頭の「緒言」にあるという事実は注目すべきことである。緒言は訳本の原理・原則を述べる部分である。その精神は当然それに続く本文を支配すると考えられよう。この点、第一巻内部の項目に言語(詞姿)使用論が現れないのは、やはり大きな矛盾であろう。しかし、ペインとスペンサーという本質的には違う思想を持つ二人の大修辞学者を小さな訳本に同時に持ち込み、調和させることは容易ではなからう。議論が核心に入るにつれて、互いに反撥し合い論旨の一貫性を保つのは困難であろう。しかし、又、一旦書かれた事柄は、変形されてはいるが、再び後に姿を現すこともあろう。それは、いずれの場合も具体的な表現に即して検討されねばならない。

以下では、これを詞姿論(第一巻、第1章)を対象に、章内部の項目を更に詳しく調査しつつ、原文と訳文との対応関係を吟味してみたい。

3. 詞姿論の抄訳・訳述

古典修辞学では、詞姿論と並んで創構論、構成論の二部門が欠かせないが、ペインの場合、すべてが詞姿論である。巻2のジャンル論、巻3の模範文例集も詞姿論に基づいているといえる。しかし、これは必ずしもペインに、創構、構成についての知識が乏しかったということにはならない。ペインは、創構、構成論を踏まえて詞姿論を展開しているのであり、この点できわめて個性的な詞姿論となっている。

表3 CHAP. I (第一章) 詞姿再編部の構成と翻訳の状況

PART I STYLE IN GENERAL (第一巻 文ノ体格)		
CHAP. 1 The Figures of Speech (第一章 文趣)		
原本の項目番号	要旨部	解説説明部
1	○ ①	○ ②
2	×	○ ③④⑤⑥⑦⑧
FIGURES FOUNDED ON SIMILARITY (第一款 契合格)		
3	○ ①②	○ ②④
of similitudes generally (契合総論)		
4	○ ③	×
5	○ ⑤	△ ⑤
6	○ ⑥	○ ⑥
7	○ ⑦	○ ⑦
8	○ ⑧	×
9	○ ⑨	○ ⑨
10	○ ⑩	○ ⑩
11	○ ⑪⑫⑬⑭	×
12	○ ⑮⑯⑰⑱⑲	○ ⑱
13	○ ⑳㉑㉒	×
14	○ ㉓	×
15	○ ㉔	×
simile, or comparison (比較)		
16	○ ㉕	△ ㉕
metaphor (諭言)		
17	○ ㉖㉗	○ ㉖㉗
18	○ ㉘	○ ㉘
19	○ ㉙	×
20	○ ㉚	×
21	○ ㉛	×
22	○ ㉜㉝㉞㉟	×
personification (做生)		
23	○ ㊱㊲㊳	×
24	○ ㊴	×
25	×	×
26	○ ㊵	×
allegory-fable-parable (比喩)		
27	○ ㊶	○ ㊶
28	○ ㊷	×
29	○ ㊸	○ ㊸
30	○ ㊹	×
remaining figures of similarity (契合格中ノ文趣余論)		
REMAINING FIGURES OF SIMILARITY		
31	○ ㊺㊻㊼㊽㊾	×
FIGURES OF CONTIGUITY (第二款 類推格)		
32	○ ①	
(換言法)		
33	○—②③④⑤⑥⑦—○	
(挈領法)		
34	○—⑧⑨⑩⑪—○	
(転換的形容)		
35	○ ⑫	○ ⑫
FIGURES OF CONTRAST (第三款 反対格)		
36	○ ①	×
37	○ ②	×
38	○—③④⑤—○	
39	○ ⑥	○ ⑦

注(1) カッコ内は、訳本の見出し項目である。
 (2) ○印は訳出部、×は訳出なし、△は一部訳出を示す。
 (3) ○×△印の横の番号①②③……は、訳本の文番号(私に付した
 もの)である。

また、ペインは、様々な詞姿を新しい原理の下で再編成しようとしている。もちろん、完全な「方式化」など望むべくもなく、EPIGRAM 以下 8 種の詞姿は、どこにも関連づけられぬまま独立しているのであるが、simile, metaphorなどは、SIMILARITYの項の下に収められている。CONTIGUITY, CONTRASTも、再編のために立てられた新しい項目である。様々な旧来の詞姿がこの項目の下に収まっている。しかし、三つの新項目のうち、SIMILARITYの末尾にあるREMAINING FIGURES OF SIMILARITYは、原本の目次ではsimile… parableなどと同じ扱いを受けているが、本文中の小見出しでは、このように大文字となって、第四の新項目のごとき体裁となっている。このことは、この項目内の具体的な叙述内容とも絡み合っており、ひとつの問題を提起しているのである。

以上、原本においては個性的な、あるいは、問題を含む詞姿論が抄訳・訳述されているわけである。前章で述べたように、訳者の原本理解の仕方は複合的であった。それは訳出の省略、添加、粗密などの結果となって現れる。本稿では、詞姿再編部に限り、その様相を表3にまとめて前頁に掲げた。

原書の本文は二種類の活字で組まれている。詞姿理論の要旨を述べた部分に、その解説説明の部分が増えられているというのが、項目1~39までの基本的パターンである。解説説明部の活字は1ポイント小さい¹⁰⁾。

訳本はこれらすべての叙述を、序論部8、契合格53、類推格12、反対格7の計80の文で支えている。訳本の活字には大小の区別はないが原本に合わせてみると、表が示すように訳出が行われなかったり、手薄になったりする箇所は解説説明部に集中している。確かにその中には読みやすさがやや損なわれる程度の箇所もある。しかし、二、三の箇所では、訳出の省略や失敗が、原本の基本的な性格の把握を危うくする結果を招いている。この典型的な事例が、次の3.1と、3.3(反対格)である。また、原本の大文字、小文字二通りの表記、REMAINING FIGURES OF SIMILALITY (remaining figures of similarity)の提起している問題については、3.2において詳述することにする。

3.1 契合格論(隠喩論)

この訳本でいう「契合」とは、AとBの異なる対象を心の中でぴったり重ねることである。だから契合格は、A、Bをあたかも一つのもので認めて感じ取る心の動きを本質とする詞姿群である。

隠喩(論言)は、このような契合格中の詞姿群の中心にある。その形成原理は契合格中、他のそれとも共通する部分が多い。そこで、隠喩によって、契合格を代表させる。

次に隠喩形成の原理を述べた部分の原文と訳文を示す。

3. The intellectual power named Similarity, or Feeling of Agreement, is the chief, inventive power of the mind. By it similitudes are brought up to the view. When we look out upon a scene of nature, we are reminded of other scenes that we have formerly known.

This power of like to recall like (there being also diversity) varies in different individuals. The fact is shown by the great abundance of comparisons that occur to some men; for example, the great poet, Homer, speaking of the document of Apollo from Olympus, says, "He came like night."… (p. 22)

4. The tracing of resemblances among the objects and events of the world, is a constant avocation of the human minds.

In Science, general notions are classified together on the basis of some feature that they possess in common …

Reasoning is often based on the similarity or identity of two or more things. When we infer that the men now alive will die, it is because of their likeness in constitution to those that went before them. This is called reasoning by Analogy.

A comparison is often intended to serve for an argument, as well as for an illustration. (pp. 22~23)

契合即チ同一ノ感応ト称スル知力ハ、心ノ主タル起造力ニシテ、物ノ同一ヲ知ルハ、此レニ由ル。宇宙ノ森羅万象ヲ視テ、其先キニ知りタル類似ノ状情ヲ再現スルモノ是レナリ、例ヘバ和墨耳ガオーリムパスヨリ「アポロー」神ノ降レルコトヲ謂テ曰ク、「彼レノ来ルヤ夜ノ如シ」ト。(第一款①②)

類似ヲ、世界ノ事物中ニ追跡スルコトハ、人心ノ休期ナキ餘事ナリ、而シテ大ニ科学ニ於テ発ス、理論ハ皆之レニヨリ起レルナリ(第一款③)

原文のこの部分には、ペインの隠喩論の特徴が最もよく現れている。全く新しい対象物や出来事だと思っても、それは以前に発生したモノ・コトに必ずどこかで似通っているものであり、我々人間には、その類似を知り、感じ取る力が具わっている、と言うのである。もちろん、このような「類似理論」は伝統的なもので、ペインもアリストテレスの「……優れた隠喩を作ることは、同じからぬものの中に、同じものを直覚すること……」¹¹⁾という考え方に基づいているのである。だから、現代の隠喩論からすれば、彼の類似理論は単純素朴な古典的理論として退けられるかもしれない。確かに生きた隠喩の形成原理は、I.A.リチャーズが言うように、本質的な違いを持つ、A、B二つの対象物(出来事)を一つのものとしてとらえる言語主体の限りない交渉を前提とする¹²⁾。隠喩の力動的な意味作用はこのプロセスが内包されているからである。この点については、ペインも改訂増補版において「違う種(kind)に属する事柄でなければ詞姿とは呼ばない」¹³⁾と述べて、A、Bの「離れ」の意義について言及してはいる。しかし、それは、モノ・コトの考察に限られ、読者の想像力を媒介に成立しているリチャーズの隠喩論とは違う。しかし隠喩形成の原理は、いずれに力点を置くかは別にして、基本的に、類似——差異の関渉作用である。ペインの隠喩論は、差異への目配りが十分でない上に、普遍的な観念(概念)の類似にとどまっているが、所々に、新しい隠喩論の基礎となるような語が現れている。先に引用した原文中に見られる *inventive, reasoning, argument* という語がそれに当たる。これらの語は、ペインがAとBを「直覚的」に同一視するというような考え方ではなく、二者の間を当時の最新の *science* で交渉させようと試みたことを示すものにはかならない。

隠喩を創造したり解釈したりする際にも我々は「創構の力」(*inventive power*)を発動しているのである。A、B間の距離が遠ければ遠いほどA、B間を関係づけるべく論証(*argument*)することが必要となる。論理的に筋道を立てて考えること(*reasoning*)が求められる。本来なら論証には情的要因も関係し、時にはこれが論理よりも大きな力を振うことがある。あるいは論理の内に混じってそれを生き生きと活動させることもある。

ペインが、知情(意)の二(三)本の柱を立て、隠喩もこの視点で説明しようとしながら、ここでは知的側面に偏り、改訂増補版になって初めて、

Many comparisons are both intellectual and emotional, having a mixed effect. (p. 151)

と明言しているのであるが、この原本においても不完全ながら創構論の輪郭は出来上がっていると思う。

訳本は、この点において、原本と大きな隔りがある。inventive power は「心の起造力」と訳され、具体例も一部訳出されている。しかし、この起造力のメカニズムについては一切「解説説明」されていない。これを述べることこそ、当時の第一級の「科学」を解き明かすことであった。訳本はそこを「理論ハ皆之レ（類似ヲ、世界ノ事物中ニ追跡スルコト）ニヨリ起レルナリ」とだけしか述べていない。A, B の類似と差異を相互に関渉させて論証し表現を練り上げていく、あるいは、そのためのルールを考える、というような発想に乏しいのである。

訳者は、「構成」においては、何らかの欠落を意識した時、ペイン以外の修辞学者を援用し、それを埋めようとしていた。この隠喩論についても、やはり、スペンサーの影が見られる。しかし、その、「(-)理会力ヲ省キ、(+)感得ヲ深造シ、協合ノ驚異ヲ来タス。」¹⁴⁾の文は、全く、前述の創構論とは結びついていない。訳本の隠喩論は、こうして、創構論、構成論など修辞学の他の領域から切り離され、それ自体が孤立するという結果に陥っている。

I.A. リチャーズは、隠喩形式の方法について次のように述べている¹⁵⁾。

……いかなる 2 物をも無数の数の異なる方法で結合することができます。そのうちどれを選ぶかということは、ある、より大きな全体、または目的に関係づけることによって決定されるのです。……〈中略〉……解釈はすべて、関係づけの補充です。

ペインの考えていたことは、「無数の数の異なる方法」で結合（契合）の可能性を求める、という水準にまでは達していなかった。しかし彼も、限られた数のパターンによってではあるが、「より大きな全体、または目的」の下で、二物の結合を図っていた。隠喩（比喩）表現は、限られてはいるが、その範囲の内では生きた異形であった。そして、それを可能にしたのが、詞姿論の中に入り込んで生きている創構論であった。

訳者には、このように、部門としては存在しないが他部門の中に生きている創構論をとらえることができなかつた。それは、リチャーズのような発言を経て、P. リクール (P. Ricoeur) 等の隠喩論に発展、深化していくものであった¹⁶⁾。つまり、彼はペインの中に潜む、新しい修辞学（文体論）の芽というべきものを見出し訳本に位置づけることに失敗したのである。

3.2 REMAINING FIGURES OF SIMILALITY (SYNECDOCHE) の問題

本文中の見出しだけが大きい文字で、

FIGURES FOUNDED ON SIMILALITY

REMAINING FIGURES OF SIMILALITY

FIGURES OF CONTIGUITY

FIGURES OF CONTRAST

となっているのであるが、形式的・内容的に不統一の印象が強い。いわゆる「余りの詞姿」が新たな項を作るなど、いかにも不自然である。しかし、それならばこれはペインの単なる誤記なのか。ここで扱われている詞姿の性格を考えると、彼は誤るべくして誤ったとも推察できるのである。

SIMILALITY のうちの余りの詞姿とは、提喩(シネクドキ)を指している。ペインは、次の

ように説明している。

31. The term “Synecdoche” is applied different kinds of Figures. The following forms of synecdoche are figures of similarity :

(1.) Putting the Species for the Genus : as, bread for the necessaries of life generally ; cut-throat for murderer or assassin ; sums for arithmetic.

(2.) The Antonomasia puts an Individual for the Species. “Every man is not a Solomon ;” “he is a Caesus” (in wealth) ; a Jezebel.

(3.) Putting the Genus for the species ; as, a vessel for a ship, a creature for a man.

(4.) Putting the Concrete for the Abstract. (p. 39)

このように、種一類の関係、抽象—具体の関係を利用した喩えを挙げ、「理解力と感情とに訴え、…対象が直ちに心に浮かび上がってくる。」(The force of this figure depends on the superior effect—as regards both the understanding and the feelings——…, and more readily calls up a distinct object to the mind.) と、その特徴を述べている。

しかし、一方、彼は提喩を CONTIGUITY の下にも位置づけ、次のように言う。

34. (1.) The chief form of the SYNECDOCHE consists in naming a thing by some Part of it.

(2.) The reverse operation of using the Whole for a Part is a species of synecdoche : ...

(3.) The name of the Material is given for the thing Made : ...

(4.) The name of a passion is sometimes given for the object that inspires it ;

... (p. 43)

要するに、種一類の関係が成立するものは SIMILARITY の提喩に属するが、その関係が緩くなったり崩れたりするものは、CONTIGUITY の提喩となるのである。これは、提喩に関する古典修辞学以来の定義法であった。広義の提喩は、SIMILARITY, CONTIGUITY の両方の詞姿を包括するが、狭義では前者のみを指す。後者は、特に換喩(メトニミー)と呼ばれることがある。この点については、ペインも改訂増補版で脚注を設けて詳述している。

Synecdoche was chiefly limited to the various ways of using the part for the whole, and vice versa ; Metonymy being employed when the things interchanged were not so connected. Under the relation of whole and part, was included genus and species ; ... (p. 191)

しかし、両者の境界は、曖昧微妙である。それは、ペイン自身が上のような定義をしながら、34 (4.) の提喩を改訂版では換喩の項に入れ替えていることでも分かる。SIMILARITY, CONTIGUITY にかかわる心的活動、思考、認識、類推、連想……などは、実際の A, B 二物の比較では、互いに混じり合い重なってしまう。こうして、SIMILARITY の余りの詞姿は単なる余りではなく、次項目の CONTIGUITY にも入り込んでいく性質を本来持っているわけである。余りの詞姿の中心をなす提喩は、両領域にまたがる粘代の部分にたとえることができる。

以上のように考えて来れば、本文部の小見出しの付け方が結果的に誤りであっても、その誤りは不注意ではなく、本文執筆中、内容上の性質によって必然的に生み出された誤りである蓋然性が高い。ペイン自身が自覚的にとらえていたかどうかは別にして、この誤りは一種の高度

な誤りなのである。

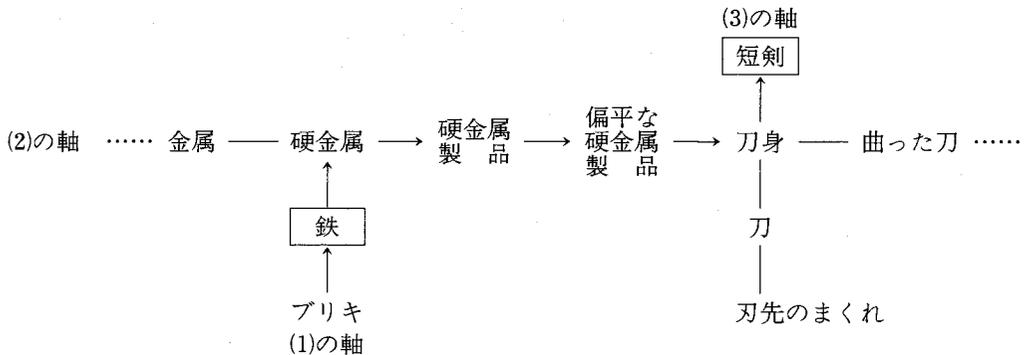
提喩は、このような見方を受け入れるならば、余りの詞姿の中心どころか、比喩全体の中心に来る。そして、それは、現代修辞論の動向と共鳴する部分さえ持っているのである。

提喩を比喩全体の中心とする考え方は、グループ・ μ のメンバーによって行われた。彼らは、比喩（詞姿）論に入る前に、まず、「表象の世界の叙述モデル」を設定している¹⁷⁾。

- (1) クラスの入れ子構造——→例えば木は枝、茎、幹、葉などから成っている。木は、これら構成体を包括して行くと、最終的なクラスとして認識される。
- (2) 分解樹（系統樹）——→例えば木は落葉樹、ポプラ……の関係の中でも認識される。（宇宙全体——諸要素の関係）
- (3) 内心的系列——→例えば木は、林、森、山……を連想させる。これは、木の意味素を附加することによっている。

提喩形成には、これら3つのモデルがすべて関与しているとされている。

例えば、「短剣のかわりに使われる鉄」（提喩）の場合、下に示すように¹⁸⁾、2回の認識と1回の連想が組み合わさっている。提喩もやはり認識作用を基盤にした連想作用なのである。これは、「論理的な連想」と言いかえることもできるであろう。これが提喩が一方で隠喩に接する理由である。また、同時に、提喩が換喩と接する理由ともなる。そして、その「論理的な連想」こそ完全な創構力が具えるべきものにほかならない。



ペインの創構についての考え方は、前述の如く明確に述べられてはいるものの、限定され形式的なものであった。この点で、グループ・ μ の発想とは大きな違いがある。しかし、ペインも、同様に、論理的認識力と連想力・想像力との積として提喩を見ており、それだからこそ、SIMILARITYとCONTIGUITYの境界の重複を引き起こしたのではないかと推測される。境界部の混乱は提喩の性格から考えて当然のことであるとも言え、これはやがてはグループ・ μ のような、提喩に比喩の中心的位置を要求する主張となっていくものであろう。原本の二種類の表記は、これら一切のことを象徴的に物語っているように思われる。

訳本においては、表3が示すように、全くこのような表記の揺れと無縁である。内容的にも要旨部だけが淡々と訳出し続けられている(31④~⑤)。第二款以下になると、急に、訳出の密度が落ちている(32~35①~②, 36~39①~⑦)。原本のFIGURES OF CONTIGUITYは、metonymyにしてもtransferred epithetにしても、提喩の性格を持っている。それは西洋の修辞学の特質でもある。訳本では、「契合」の部分でもinventive powerは訳語だけが与えられその内容の理解は成立していなかった。隠喩にさえinventive powerを必要としなかったものが、

提喩や換喩（訳本では「挈領」「換言」という訳語をあてている。）になぜ殊更取り立てられる必要性があるのか。それらは、隠喩などとは連続性を持たず、根本的に違う詞姿なのである。連想や想像だけの作用による詞姿なのである。

ひとつの表現の裏の意味をとり、それとのひびき合いにおいて新しい表現を展開し、ゆかりと連想の糸でこれを縫い合わせる。論理を推しすすめて行くのには適当でないかもしれないが、飛躍と浮動のあわい、ゆらめく意味をとらえることを喜ぶならば、日本の修辭はまことに味わいふかいものとなるのである¹⁹⁾。

これはわが国の修辭（詞姿）全体の特質について述べた文章であるが、最もその特質が現れるのが、提喩であり、換喩である。西欧的な論理が隠れて「ゆかりと連想」によるこれらの詞姿は、受け手が同質的であればそれだけ「比喩であることを意識されない比喩」となる。無意識のうちに強い力で受け手に同質の影響力を与え続ける。この意味で提喩や換喩は修辭全体の中心となる。しかし、これは西欧の修辭学の提喩の位置づけの論理と全く異なっている。

ペインの表記の違いをめぐる訳本の対応の仕方は、提喩だけでなく、西欧と日本の詞姿の本質の違いについて、明治期から現代という視野で、様々な問題を提起していると言える。

3.3 反対格について

反対格の訳述には、契合格(3.1)と同様、解説説明を省略した弊害が現れている箇所がある。その部分の原文はスペンサーの考え方を基本に更にペイン自身の独特の言葉によって造り上げられているのであるが、訳本からその軌跡を追うことは不可能である。スペンサーへの目配りさえここではなされず、その結果、訳文は木に竹を継ぐような生硬さを見せている。

以下、具体的に説明する。

36. It is a first principle of the human mind that we are affected only by change of impression, as by passing from hot to cold, from hunger to repletion, from sound to silence. This applies to both Feeling and Knowledge.

Every outburst of feeling implies that we have passed from one condition to another. In some emotions, as wonder, the prominent fact is a transition from a previous state; the shock of change is the cause of the feeling. In like manner, a sense of freedom presupposes restraint, and the sentiment of power some previous state of importance or weakness.

Knowledge, likewise, implies transition. We know light by having passed out of the dark, height by comparison with depth, hardness with softness. In short, knowledge is never single; it must have at least two objects, sometimes more than two. Our knowledge of man, for instance, takes in all that we ever contrast with man—God, angel, animal, &c. ……*

37. Antithesis, properly so called, consists in the explicit statement of the contrast implied in the meaning of any term or description. (pp. 46~47)

*It is like judging by placing them beside their contrasts, instead of trusting for these to memory. Thus a white surface appears brighter in proximity to black; a weight is compared with a present, instead of a remembered, standard.

人心ノ最第一ノ原理ハ、寒ヨリ熱、飢ヨリ飽、音ヨリ黙ニ移ル如キ感得ノ変化ニ感スルコト是レナリ、感覚及ヒ智識並ニ此理アルナリ。反対法（アンテゼシス）ハ、其語字中ニ含蓄スル反対ノ明言ナリ、余ハ二人ヲ誉ム而シテ第三ノ人ニ非スノ如シ。（第三款①②）

この訳述文では、原文の説明の部分、脚注の部分が全部抜け落ちている。そのために、原文中のキー・ワード“change” (to pass from A to B) の内容が十分把握されていない。訳語として「移ル」「変化」は充てられているが、「其語字中ニ含蓄スル反対ノ明言」との関係となると全く見当がつかない。二つの訳文の間は、このままでは距離がありすぎて、理解することさえ容易ではない。その上「其語字中ニ…」のそれぞれの語の正確な意味さえ判然としない。

しかし、この疑問はベインの説明書き（脚注）を読むとたちまち氷解する。彼は、そこで、次のように説明している。

対照格は基本的に A → B の順序の詞姿である。これは、かつてスペンサーが注目したことである。ベインが脚注に引いている‘…a white surface appears brighter in proximity to black’ の用例もスペンサーからそのまま借用しているのである²⁰⁾。「白」→「黒」→「白」の「移り」の中で「白はますます輝きを増す」。スペンサーの意図は、黒を順序の中央に入れることで、最も効率よく白の表現価値を高めようというところにあった。これがいわゆる「表現の経済」に当たるわけである。

このようなスペンサーの考え方をベインも一部忠実に受け継いでいる。例えば‘the shock of change’ (feeling, emotions) という語による説明は、一段と輝いて心に刻印される白の明るさを感情的な面からとらえ直しているのである。そして、このような経過をたどってもたらされる効果は、確かに対照格の大きな特徴であろう。それで互いに他を際立たせ、強調するのである。

しかし、ベインの対照格はこれにとどまるものではない。彼が PREFACE など述べている「智、情（意）」論により、知性の作用にも同じように注目しているのである。それは‘plural knowledge’ 論となって、対照格にもう一つの性格を与えることになるのである。

先の例で言えば、黒からいきなり白を見た時の感情的な揺れは確かに激しいものがある。しかし、この衝撃は知性によって巧みに抑制されることがある。我々は黒があれば白、闇があれば光があることを既に知っている。そのために一方が言語化されていなくても、知識によって補って衝撃を和らげることができるのだ。対照格は、意図的に両方を言語化して、衝撃を更に相殺し、独特の表現効果を生む。それは「サスペンス」とも呼ばれる。それは、相対立して拮抗する二つの言葉がもたらす緊張である²¹⁾。

しかし、ベインはもちろん「サスペンス」という語をここで用いているわけではない。それは、対照格を使用する人間の、知・情・意の相互交渉の結果ようやく得られるはずの語だからである。彼の対照格の見方は、隠喩に含まれた創構に限られたパターンによるものだったように、この詞姿のもたらす効果を一旦、情の働きと知の働きに分けて合わせる、つまり分析、合成するというものであった。得られるものは、限定された組み合わせによる複合物であり、それは力動的な交渉の結果得られる新しい概念とは違っていた。ベインの使っている‘the explicit statement of the contrast implied in the meaning of …’ という長い語句が、このような事情を端的に明快に説明している。いわゆる連合説の本質を明快に言い当てていると思う。

このようなベインの考え方は、しかし、欠陥はあるけれど、スペンサーのような考え方と後の世代の近代修辞学者の考え方をつなぐ重要な理論である。ベインは確かに新しい語（「サスペンス」）は得ていないが、それを生み出し支える個々の語は、すでに持っていた。あの長い語句

は新しい一語になる前の姿である。そこには、スペンサーの「表現の経済」だけでは割り切れない、様々な文体的異形を生み出す可能性が感じられる。

訳本の二つの文からは、このように考え、想像したりする手掛かりを求めることができない。物事の結果だけが訳されて、結果に至る過程は一切無視されている。読者は、文と文との間に介在する最小限の情報さえ与えられないので、唐突に投げ出された二つの結果を前に思案する外はないのである。

普通、このような場合、訳者は二つの方法を考える。一つは、前例のようにベイン以外の人の対照格に関する説を持ち込むこと、もう一つは自分自身の言葉で空隙を埋めることである。ここでは、どちらも採られていない。その理由は容易に見当がつく。仮にスペンサーを引用してみても、先に見たように、ベインの対照格論のすべてが説明し切れるわけではない。だからと言って自分自身で補筆するには、ベインの斯新さに異和感を持つだけで、引用以上の労苦を要求されるであろう。どのように考えてみても、沈黙以外の方法はなかった。それが、訳者にとって、最善の選択であった。

4. ま と め

これまでの『文章哲学』における詞姿論の性格に関する考察の結果、明らかになったことを次に要約しておく。

1. 訳本『文章哲学』における、「第一巻 文ノ体格」内部の構成は、原本 PART I STYLE IN GENERAL のそれと違っている。これは「スタイル」に対する把握の仕方が原著者と訳者では根本的に違っていることを示唆している。つまり訳本では、スタイルの基本的条件である詞姿使用論（言葉の選択論・配置論）——これは原本の改訂増補版では更に充実する部分である——が欠落している。しかし、訳者は、必ずしも成功しているとは言えないけれど、その欠落部をスペンサーを持ち込むことで埋めようとしている。

2. 訳本の隠喩論（契合格論、諭言論）には、原本に認められる創構論がない。この場合も、スペンサーの持ち込みが図られるが、結果的には失敗に帰している。そのため訳本の隠喩論は詞姿形成の原理原則論を失い、詞姿論だけが、他の創構論、構成論から切り離されて孤立するという事態を招いている。

3. 原本には提喩（挈領格）の位置づけをめぐる混乱がある。この混乱には、提喩が抱える古くて新しい問題（換喩や隠喩などとの境界が判然としないので、様々な詞姿再編論が生まれる。）が象徴的に現れていると考えられる。訳本には、混乱はなく、提喩の位置は安定しているが、そのために、隠喩や換喩などは没交渉となっている。これは、我が国の提喩が最も情緒的な比喩として、独特の発達を遂げたという事実に関係するかもしれない。

4. 反対格における訳述については、原本の説明書きの部分の省略があり、結論だけが訳出されているので、理解し難い。「其語字中ニ含蓄スル反対ノ明言」(the explicit statement of the contrast implied in the meaning of any term or description) は、代表的な例である。原本ではこの言葉は十分に説明されているが、訳本ではなされず、反対格のもう一つの表現的特徴（サスペンス）をとらえるに至っていない。

5. 訳本における、2~4の詞姿論の性格は究極的には、1のスタイルのとらえ方と深い関連

性を持つと考えられる。

以上の要約により、この明治中期の修辞学書の詞姿論の梗概が明らかになったと考える。もちろん、各項における具体的な例は十分ではなく、5のように推論をそのまま記している場合もある。これらの課題は、この修辞学書のみならず、周辺の資料を検討することで、改めて考えてみたいと思う。

本稿では、終わりに、今村長善という訳述者によってなされた受容の特徴について補足しておきたい。本文や要約でも述べたように、訳述はペインを主としつつも、スペンサーに代表される他の人々の情報を材料に行われている。そして、これらの複数の情報の操作の難しさということも先に指摘した通りである。

しかし、この訳述の場合、今村の苦悩はペインをとらえようとした時、既に存在したのではなからうか。ペインの原本には、修辞学に対する伝統的な考え方とともに新しい考え方が幅広く認められるからである。しかも、それらは、ペインの内部で互いに関連性を持って活動している。新しいものも、古いものを土台として生まれたのである。しかし、その新しいものも、いつかは古くなって、より新しいもの（それは現代の修辞理論にまで行きつく）を生み出す土台となる。この無限の流れの一端が、一冊のテキストの内部に認められるのである。この意味で、原本は生成体であり、このことは、ペイン自身の成長ということとも重なるであろう。

訳述者はこの流れの流れとして移し変えようとして果たさなかった。彼がとらえたものは、ある時点におけるペインの論のいくつか、つまり、点の集合ではあっても、決して生成して行く運動体ではなかった。そこに、この訳述の限界と特徴が現れているとも言える。

注

- 1) 西尾光雄『近代文章論研究』（昭和26年、刀江書院、p.104）
- 2) 「明治期における英国のレトリックの受容(V)——高田早苗『美辞学』における H. Spencer の引用——」（『上越教育大学研究紀要』第3号、昭和59年3月）などで検討した。
- 3) 国立国会図書館蔵本。明治8年文部省交付。1866年の初版本（イギリス Longmans 社）の版權を、同年、アメリカ法令に基づき D. Appleton 社が取得することによって出版された。
- 4) 国立国会図書館蔵本。
- 5) 詞姿論ではとりわけスペンサーとの関係が注目される。訳者今村の付けた英題“Philosophy of Composition”は、ペインとスペンサーの書名から一語ずつ借用した結果となっている。
- 6) 「……選択というのは、同じ内容をいくつかの表現のどれによってもあらわすことができる場合に、その採用可能な表現の集まりから、一つを選び出すということである。そして選択は意識的になされた場合も、無意識的になされた場合も共に含めて考える。（樺島忠夫「文体の変異について」『論集日本語研究』8文章・文体、有精堂、昭和54年、p.145）
- 7) PREFACE より。
- 8) PREFACE, vi.
- 9) 引用文は原則として新漢字、旧仮名遣いとした。略字合字は書きかえた。（以下の引用も同じ）

- 10) 本稿では要旨部をゴシック体で表し、解説説明部と区別する。
- 11) 松浦嘉一訳『詩学』(岩波文庫, p. 111)
- 12) 石橋幸太郎訳『新修辞学原論』(1961, 南雲堂, 第5講 隠喩論, 第6講 隠喩(つづき))
原書は1936年刊。
- 13) “In order that Resemblances may be Figurative, the things compared must differ in kind.” (p. 138)
- 14) 第一款⑩の文。解説説明部の文であり、創構論が不十分ながら認められる先の引用文第一款③と関連していない。(表3を参照)
- 15) 12)の書物, p. 115
- 16) 「……読解行為において活動する〈と見る〉が、言語的意味と充実したイメージの接合を確実にする。この接合はもはや言語外で起ることではない。それは関係として反省され得るからであり、その関係こそまさに類似である。しかももはや二つの観念の間の類似ではなく、〈と見る〉を成立させる類似である。」(久米博訳『生きた隠喩』1984, 岩波現代選書, p. 273) 原書は1975年刊。
- 17) 佐々木健一, 樋口桂子訳『一般修辞学』(1981, 大修館, p. 192) 原書は1976年刊。
- 18) 同書, p. 206.
- 19) 外山滋比古『日本の修辞学』(1983, みすず書房, pp. 153~154)
- 20) H. Spencer, “The Philosophy of Style”
- 21) “Antithesis has been a very popular device with self-conscious writers, and……. Antithesis operates by a tension or suspense between two ideas; the sentence becomes a balance between equal but opposite forces.” (H. Read “English Prose Style” 1952, Beacon Press, p. 40, p. 42)

参 考 文 献

- ① 佐々木健一編『創造のレトリック』(1986, 勁草書房)
- ② S.チャットマン「スタイルの意味」(M.レイン, 篠田一士監訳『構造主義』1978, 研究社 所収)
- ③ 尼ヶ崎彬『日本のレトリック』(1988, 筑摩書房)
- ④ 山梨正明『比喩と理解』(1988, 東大出版会)
- ⑤ 石川淑子「隠喩の意味論的考察」(論説資料保存会『国語学論説資料18』第三分冊, 昭和56年, 所収)『相模女子大紀要44』
- ⑥ 石川淑子「隠喩における類似性について」(『国語学論説資料19』昭和57年所収)『相模女子大紀要45』
- ⑦ 岩田和男「比喩の復権」(同資料19)『表現研究36』
- ⑧ 菅野盾樹「隠喩における真理」(同資料21, 第一分冊, 昭和59年所収)『大阪大学人間科学部紀要10』

Acceptance of British Rhetoric in the Meiji Era (VII)

—The characteristics of the theory of figures
of speech in “Bunsho Tetsugaku”—

Shuntaro ARISAWA

ABSTRACT

“Bunsho Tetsugaku” (Philosophy of Composition, 1889, Tokyo) was not originally written by Imamura Chozen. As Professor Nishio indicated, the most part of it was abridged from A. Bain’s “English Composition and Rhetoric”. This English text has many versions, one of which, the American version (1871), Imamura used as the text for his translation. In the Japanese abridged version, there are some additional passages which he wrote by himself. In case of writing the theory of figures of speech, however, he formed his own thought, often referring to H. Spencer’s “The Philosophy of Style” (1858).

Comparing the Japanese version with the English one, first of all, the content of PART I (STYLE IN GENERAL) is remarkably different. This difference is meaningful and is not thought to be so simple as it appears, since it is related to Spencer’s theory.

Secondly, comparing the expressions of the English text and other materials with those of the Japanese one, three problems can be pointed out in the theory of figures of speech as follows:

- (1) Missing of invension in the theory of Metaphor
- (2) Treatment of Synecdoche in figures of speech
- (3) Omitting the details of explanation in Contrast

When we consider Imamura’s understanding of “Style” insufficient, these problems are not surprising. He did not understand the fundamental theory of A. Bain’s figures of speech as fully as he thought. Moreover he had little knowledge about the modern rhetoric which was developed by A. Bain himself.

However the passages which he failed in interpreting may actually be what he really wanted to say. We can clearly see Japanese characteristics of expressions in these sentences.